
魔不良冒険奇行 ~ 怪傑！ 超電磁砲編 ~

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔不良冒険奇行 ～怪傑！ 超電磁砲編～

【Nコード】

N0596Z

【作者名】

ヒロ

【あらすじ】

「電撃！ 学園都市編」の第2部になります。テーマは「とある科学の超電磁砲」ですが、話を考えているとなかなかどうして超電磁っぽくならないものです。

～あらすじ～

学園都市に迷い込んだ天然種超能力少年を名乗るにはあまりに

も肉体派の不良少年・伊吹圭介が学園都市制覇を目論見、財布片手にフードコートを闊歩する！

迸る胃液、唸る腹の音、消えゆく財布とその中身。
ついに出来るのか超能力!?

次の日・早朝 「5:00」 「1日、あんたたちのために体を張ってやる」

まさに奇跡である。

爆発炎上の食物連鎖で第一学区工業倉庫は玩具箱をひっくり返したような大騒ぎになったのは不幸中の幸いだったといえる。

現場の警察はこの上ないほど混乱し、圭介はバイクとグローブを回収、すたこらと逃げることができた。

おかげで徹夜でガラクタ同然のバイクを押す羽目になったのだが、残せば証拠になる。なにより思い出の品だ。無碍に扱うわけにもいかなかった。

すり傷切り傷は全身に及ぶものの五体満足で切り抜けられたのだ。あれだけの危機に瀕しておきながら。

まさに奇跡である。

それを象徴するかのような、清々しい朝焼けだ。

あの闇は晴れて小鳥はさえずり、周囲は傍の小川のせせらぎすら聞こえるほど物静か。パトランとはまったく無縁で 徹夜明けの圭介の横顔に、冷えたそよ風が鞭を打った。

「はあ………」

奇跡だなんだと並び立てたが、さすがの圭介も体力の底を見せてきた。

72時間程度は働ける自信があったのだが。極限的な連続タイムと逃走の緊迫3連コンボは伊達ではない。

ずるずるずるずる。

ずるずるずるずる。

爽やかな朝にバイクを引きずり圭介はひとり歩いていく。

警察と鉢合わせするのがイヤである手この手で迂回を敢行したのだが、道行く先にはATMもコンビニもない。人気はなく（逃げている身としてはありがたいのだが）、また車両の通りもない。

いい加減休みたい 狼狽した圭介がまたため息をつく。その先

で。

人影を見つけた。ふたり。身なりや背格好は似ていないふたりだ。向かい合っていて、口論という様子でもない。例えるなら道を聞いている風だ。さすがにあれは警察とは無関係だろう。

ついでに俺も道を聞こうか　急ごうにもバイクを引きずっている手前、なかなか歩調は早まらない。もどかしさと疲労感で苛立ちが強まっていく。

ふいに、向かい合っていたふたりが離れた。ひとりには奥に、ひとりには　傍のフェンスに手をかけた。

フェンスの向こうは小川だ。

この時期の川の水温が水浴びに適するかどうかは昨日体感した圭介でも判断に迷うところであるが、そもそもフェンスを越えてまで服を着たまま水場に入ろうとするのはおかしい。

怪訝に思いながらも圭介はフェンスに近付いていく。茶髪の少年が、どこか虚ろな目でフェンスを上りきり

「おっと」

ろうとしたところ、圭介に足首を掴まれた。

茶髪少年は無表情だ。いつそのままジーパン脱がしてもバレないような　と圭介は頭の隅で考える。

少年は圭介に逆らってフェンスを乗り越えようと無言で足を上げようと力を込める。圭介は嘆息して、

「でりゃ」

特別力を加えず、しかし全身の瞬発力を利用して、一発、フェンスから少年を引っっこ抜いた。

抜いた手前、抱きかかえてもよかったのだが　力負けした上に優しく抱かれたらプライドも傷付くだろう　珍しく相手のことを考えて、あえて宙空に投げっぱなしした。

圭介の傍に少年は落下した。

うつ伏せに。

顔面から。

アスファルトに。

傍から見て、かなり危険な落ち方である。受け身くらい取るものと思っていたが。

「っ痛エな！ 痛エよ！ 痛いじゃねエかよ！」

「お、おう。悪い」

起き上がった少年の剣幕に、思わず圭介は身じろいだ。今までの無感情が嘘のようだ。

「てめえ、この浜面仕上だと知つての狼藉か、ああっ！？」

「はまづら……？ あー、もしかしてそれあんたのこと？」

「がああああっ！ 喧嘩売ってんのかてめえ！ 売ってんだよな！」

「やだよメンドクせー。あんた弱そうだし」

「んだとゴラァ！」

ドスの利いた声で浜面仕上は拳を振り上げた。

圭介は肩をすくめ かしなんだかんだで拳を固めるあたり、この男も好きものである。

浜面仕上がお返しとばかりに左から顔面を狙った。

体さばきは場慣れしているようで躊躇いこそないが いかんせん精練されていない。隙も大きく読みやすい拳だ。上体を後ろに逸らし、余裕を持って圭介はこれを避けた。

続く浜面の二打目。これも顔面狙いの右。しかし先の左よりも踏み込みが深い。

圭介の上体は戻っていない。逸らすだけでは避けられない。当たる。

「でいりゃ」

気の抜けた掛け声とともに圭介は右腕を伸ばした。

それは強く殴りつけるつもりで大きく振りかぶっていた浜面の右よりも、遙かに素早く浜面の顔面を捉えた。

自分の深い踏み込みの勢いをモロに受け、浜面は軽く吹き飛んだ。

「こ……の……！」

「あーあ、鼻ピアスなんかしてっから無駄に痛いだろ。……ま、そ

「つちは吹き飛ばなかつたみたいでなにより」

涙を溜めて顔を押しさえ、浜面は圭介を睨みつけた。圭介が昨日相手取った“殺意”とはまた毛色が違う視線だ。

形容するなら、これは“卑屈”だろう。

「やれやれだぜ」

固めた拳をほどき、圭介は甚だ呆れてみせる。

思い切りの良さや反骨精神は評価できるが、酷く性格が歪んでいる。もつとも、それも昨日の相手には及ばないが。

それだけに残念だ。決意と誇りを持つようになれば、本気で殴るに値する男になれると思うのだが。

このまま流れで殴り倒しても、昨日以上の空虚で胸が満たされることは目に見えていた。

ただのチンピラをただ殴るのは、さすがにもう飽きている。

圭介は煮え切らない気分を吐きだそうと嘆息して　はたりと思いついた。

浜面は見たところ不良である。

不良とは　少なくとも圭介の常識では派手なものが好きだ。だからきつとバイクをいじくる。ならば圭介のバイクを直す算段も立てられるのではあるまいか　？

そう考えて、圭介は切り出した。

「あなたのヘッドはどこにいる？」

「はあ？　お前なに言ってる？」

「案内しろ。すぐに」

「ふっ、ふざけんなよ。んなこと」

「やらないなら……わかるよなあ？　浜面くん？」

先ほど叩きつけた右拳を攻撃的にちらつかせ、浜面の反応を伺った。生唾を飲み込み目を見開く　怖じ気づいているのは間違いない。

後はこちら言えばいいはずだ。圭介の経験的に。

「安心しろ。　悪いようにはしねーぜ」

悪いようにはしない。
果たして不良にそんなことを言われて納得する人間がどれほどいるだろう。

しかしながら経験的に、圭介は百発百中であつた。

単純な人となりの人が人を信じさせるのか、はたまた暴力が人の恐怖心をえぐるのか。それは、圭介自身の預かり知らぬところである。

* * *

「廃ビルね。なかなかいいアジトだ。俺好み」

「そりゃどうも」

浜面はふてくされたように両手をジャージのポケットに隠して、圭介の2段先を登る。

先導されて行き着いたのは3階。だだっ広いフロアだった。隅には埃を被つて雑多に物が陳列されており、さながら貧困街の露天商通りを思わせた。

その雑貨のひとつ　ソファーにもたれて、男達がじつと圭介を見つめていた。敵意が2割、好奇心が残りといった視線だ。

一度、圭介は自身に目を向けなおした。

ポロポロのジャケットに切り傷や火傷だらけの全身。浜面も顔が腫れているが、どう見ても圭介の方が重傷である。

こんな人間に畏怖する不良もそういない。

「あんたらの誰が浜面のヘッドだ？」

「俺だ」

言つて、一際巨漢が腰を上げた。圭介を悠然と見下ろして、ゆっくりと言葉を続ける。

「駒場利徳だ。一帯のチンピラは俺がシメてる。何の用件だ」

「俺のバイク直してくれないか」

なにもひねらず、圭介は用件を口にした。駒場利徳は眉をひそめて腕を組む。

「本当は自分でやりたいとこだが、生憎時間がない。頼む」

「期日は？」

「今日含めて2日。滞在ビザがそれしか取れんでな」

「ブツは？」

「おもて」

駒場利徳は舎弟らしい不良に目配せした。舎弟は一目散に窓辺まで走り、首を突っ込んで外を見下ろす。

「ゴミしかねっす」

「だそうだ」

「持ち主の俺が言うのもなんだが、確かにゴミだな」

圭介は苦笑を浮かべ、ふいにそれは、柔らかな微笑に変わっていった。

遠い昔のことを話しているようだった。

刻一刻とあの日の暴風に巻かれていく記憶の砂塵。けれどもあの想いだけは決して色あせない。

あの濃密な時間が、夢と誇りを魂に刻みつけているのだ。

「先代から譲ってもらったモンでね。俺が峠の風になるまで捨てちゃいけねーんだとよ」

今回は風は風でも爆風である。

豪快ながら妥協を許さない先代のことだ。会うが一番、圭介から事の顛末を聞き出すだろう。

想像してみる。

よう圭。それでどうした？

喧嘩した拍子に爆発したっす。はい。

はっはっはっ！……少し、頭冷やそうか。

……これ以上は無理だ。

恐怖する。骨身が凍りつく思いだった。

超能力者を出し抜いて殴り倒す圭介をして、先代は化け物・鬼・

悪魔と形容して然るべき人物だった。

勝つには相応の覚悟をしなければならぬ。腕が千切れるか目を抉られるか。死ぬ一歩手前まで追い詰められることだけは間違いない。

「しかしお前はゴミだと言う」

駒場利徳は抑揚なく事実を確認する。

甚だしく厳しい現実に、圭介はムスツとした表情で首を縦に振った。

「ゴミをバイクに、2日で直せとも言う」

「無理なのかよ学園都市様でもよう」

「可能だ。ただし相応の設備と金と労力が必要。それだけの価値がお前にあるのか？」

駒場利徳はじつと圭介を見据えている。

圭介はその意味を察していた。

試している。見極めようとしている。

この伊吹圭介を、値踏みしているのだ。

圭介は強く笑った。口端を吊り上げ、歯牙を光らせる。

胸を張ってふんぞり返り、左手の親指を立てて自分に突き刺した。

「真つ当な手段で稼いだ金が70万、加えて俺の命1日分」

「命？」

「1日、あなたたちのために体を張ってやる。言われりゃ世紀末霸王だつてぶつ潰すし、財宝だつてかき集める。ただし1日だ」

淀みない目をまっすぐ返した。ガンの飛ばし合い　と言うにはいささか敵意や攻撃性といった“悪意”がなりを潜めているもの、しかし好意的な見つけ合いのそれとはまったく性質が違う。

駒場も圭介も、決して視線は逸らさない。

「抜かすな、お前。いい自信だ。名前は」

「伊吹圭介」

言い放つも、しかし周囲の反応は薄い。けつ、と圭介は悪態をついた。学園都市という閉鎖空間では外の情報は入りにくいのかもし

れないが。

だとしても面白くない。外の不良に言えば「北陸最強の雷衝くらイトニングスマツシュ>3代目総長」として逃げていくものだ。もつとも、口走る“伝説”はたいてい尾びれが付いているものなのだが。

駒場は微動だにしない。なにも漏らさず、まったく動じず、ただ圭介をにらみ続ける。

言葉をいくつか交わしたにもかかわらず、場の緊迫感が一向に変わらない。異様な空気だった。

ざわめいていた取り巻きが次第に言葉数を減らしていった。圭介と駒場はいつしか手をだらんと下ろしたまま、互いに睨み合い続け

ふいに、駒場が動いた。

巨体に似合わぬ細やかな足運びからスタンスを取り 途端、右拳が圭介の顔面に迫る。

速すぎる。

避けられない ツ？

硬い拳が圭介の眉間を捉えた。勢いそのままに拳は振り切られる。圭介の体は軽くのけ反り、背後に大きく吹き飛んだ。数メートルを滑空し しかし倒れず、踏みとどまった。

咄嗟のバックステップが上手く威力を緩和してくれたのだ。

もつとも、軽く頭がグラグラするのは致し方ない。まともに食らえば、首から上がなくなってもおかしくなかったかもしれないのどの威力なのだ。

驚愕する駒場の際について、圭介は体勢を立て直した。肺に思い切り空気を取り込み、拳を固めた。

駒場の身体能力は異常だ。

素で壁走りを敢行できる圭介をして、そう思わせるほどに。

その異常能力が何かしらのドーピングか機械に頼っているのかは知ったことではない。

昨晚相手にした異能者とは根本的に違う部分がある。

駒場の能力は強い者を相手にするためのものだ。一瞬だが、拳動から圭介にはそれが感じ取れた。

手の内を晒さない。油断をしない。そして相手の拳動に対して神経質だ。

異能者犇めく学園都市で戦うために付いた癖だろう。弱者が強者を制するための癖。生き残るための戦略。

圭介は内心で肩をすくめた。圭介の喧嘩殺法の要は卓越した見切りと身体能力だ。

インファイト勝負は願ってもないが、技術はどつとして、身体能力はおそらく凌駕されている。先の動きはほぼ見えなかった。

集中しろ。

圭介は呼吸の線を細めていく。

見切れなければ。でなくては勝てない。

見切る。勝つ　奥歯を噛み締め、体を低く沈ませた。

「終いだ」

急に駒場は拳を解いた。目に見えて戦意がしぼんでいく。

圭介は一応、数秒構えを解かず、注意深く様子を窺い　本当に戦う気がないことを確信した。

拳を下ろし、圭介は大きいため息をついた。

「勝手に始めて勝手に終わりつてな。なんつーか。こうムカムカするぜ」

「非礼は詫びる。だが依頼に足る力量だ」

ジャケットの乱れを直すように裾をはたき、駒場は圭介に改めて目を向けた。

圭介もこれで、駒場と同じく血の気の多い不良を束ねていた男である。仕掛けてきた理由が単なる力試しだけでないことは察しがついた。

見ず知らずを何の理由もなく迎え入れることに反発する人間は少なくない。示しがつかないためだ。

だから、チームをまとめる頭ははじめをつけなければならぬ。それは面接だったり課題だったり。チームによってまちまちだ。どうやら 圭介は額に手をあてる。血が少しにじみ出ている。今回の場合は“ゲンコー発”のようだ。

「では、バイク修理を請け負うに代わり、仕事を頼みたい」
かくして駒場は口火を切り。

伊吹圭介の学園都市2日目が始まった。

次の日・朝 「10:00」 「悪い。借りと貸しのある顔は覚えてるんだけど」

劇的な体験が続いていたのでつい忘れていた。

圭介はスキルアウトから貰った消費期限切れの弁当をつついて失ったエネルギーを補充して疲労感を吹き飛ばし、ふとそのことを思い出した。

ここは学園都市。学校と勉強の街。ならば当然な話である。

昼間の街には人が極端に少ないのだ。なるほど確かに、これでは血の気の多い不良学生もすぐ目について補導されてしまう。

駒場利徳の依頼の意味が少しずつ、圭介にも理解できてきた。

「んじゃ、俺はここで」

補導されちゃかなわねーからな、とここまで案内してきた浜面が足を止めた。

圭介は振り返り、割り箸を握った手を軽く振ってみせる。

「俺のバイク、よろしく！」

「うっせえ。あんたこそ俺らの財布取り返して来い」

「任せる。豪華客船に乗ったつもりでいるんだな」

「……冰山にぶつかる奴じゃないだろうな？」

「は？ 船って山にぶつかるのか？」

「駄目だこいつ」

浜面は深くため息をついて踵を返した。振り返りもしないその背中の中は なぜだか少し、煤けてみえた。

あいつもあれで苦労してんのな、と勝手に結論付けて、圭介は弁当に残った漬け物を口に運んだ。齒ごたえのある食感を楽しみつつ、視線を伸ばす。

駒場利徳が圭介に課した仕事 あるいは依頼は、至極簡潔なものだった。

ある男を見つけて出してボコボコにしる。完膚なきまでに。一通りの事のあらましも聞いている。なんでも最近、駒場のチ

ームの人間が財布を盗まれているらしい。スキルアウトと呼ばれる彼らは異能を持たず、真つ当な学生生活を送っていないので警備員や風紀委員を頼るわけにもいかない。

上手く出し抜かれてカモにされているのだ。このままでは喧嘩っ早い不良達が見境なしに一般学生を殴り倒しかねない。

要は、緊迫した現状を打破したい、ということだ。そのためには、昼夜問わずに行動できる圭介は都合のいい人材なのだという。

もちろん駒場も1日で圭介が犯人を見つけられるとは考えていない。

ただ、自分達の捜査と別の切り口から情報を集めることで、事態が変化するのではないかと考えているようである。

とにかく犯人を今日1日で挙げられれば最強、とだけ圭介は理解していた(“最強”はどうかとして、その判断はひとまず間違っていない)。

喧嘩の時の神懸かり的な見切りと直感さえ生かせれば瞬殺だ。しかしそれらは、勘や運頼みに過ぎない。

おまけにこれで、圭介はくじ運が悪い。分の悪い賭けが嫌いでないことも理由のひとつであるが、人を直に相手取らなければ勘も相当鈍くなってしまうのも原因の一つのようだ。

見つけられない。勘だけでは。それは理解していた。

然るに圭介の取れる手段は、ただひとつに絞られていた。

“足で稼ぐ”。古風だが堅実な方法のほずだ。

元々の“ロボット討伐”の仕事もあるのだ。聞き込み自体は強いられていたことであるし、併せての情報集めはそう苦でもないだろう。

やることは決まった。

最寄りのゴミ箱に弁当容器を投げ捨てて、圭介は無造作に口を拭いた。

ひとまず向かうのは　そう、ATMだ。

* * *

学園都市。学校と勉強の街。学生の街。

学生が金を手に入れて、やることはなんだろうか？

ATMから引き出したおかげで重くなった財布をポケットの存在感を意識して、圭介なりに頭を働かせる。

まず服だ。こうボロでは目立ってしまう。

次にバイクだ。メカは男のロマンである。

ビデオはどうだ。この間のタイトルマッチは見ていて体中の血液が湧き上がるようだった。

雑誌もいい。絵付きの技の解説は映像に劣るが勉強になる。

遊ぶ金にも消える。ゲームセンターのフライトシミュレーションゲームは目が回りそうなほどリアルだ。敵機とのドッグファイトは平衡感覚を失いかねない臨場感に熱くなる。

残るは食事だ。グルメ探求に終わりはない。

などの独自の理論を展開し、金を手に入れた圭介は意気揚々と開店直後のショッピングモールへと遊びに　もとい、捜査に繰り出した。

* * *

服屋で店員を呼び止めて聞き込み、新しいレザージャケットを三割引きに値下げさせ、モーターショップではディーラーと熱心に秋

モデルに搭載されるエンジンのデリケートさについて語り合い、ビデオシヨップでは難解なサスペンス映画を熱っぽく勧めるカウンターのバイトから逃げ出して。

いかん。これはいかん。

さすがの圭介も雑念を払いのけようと頭を軽く振って、目の前の雑誌に手を伸ばす。このままでは全ての店を1日で回りきれない。流し読んだ“週刊男のミリオネア”を棚に戻し、今度は“ウィークリーガンマー”を開いてみる。

目次に“ドラマ的世代交代……ワールドタイトル争奪戦線徹底解剖”と見つけ、巻頭記事に注目する。

その瞬間。というにはいささか語弊がある。今日はこの以前にも数度、この“瞬間”に出会っている。

悪寒だ。冷たく、しかし陰湿な感覚はない。明確な殺意のにおいてはまた違う。武器を構えていないようだ。

雑誌から目を離し、遙か向こうを注視する。

向かいのビルの端。ギリギリ覗くことができる位置。目を細め、逆光に隠されたガラスの奥を透かし見る。

不意に、肩を叩かれた。

雑誌を閉じて振り返る。途端に顔を無造作にハタキで叩かれた。

「立ち読みはご遠慮願えますか」

「……さーせん」

潔く謝って、圭介は閉じた雑誌を精算して店を出る。脇に雑誌を抱え、向かいのビルを見上げた。

さて、どうしよう。

ひとまず近場のゲームセンターを探し、歩道に沿って歩いていく。思いのほか隣の車道には乗用車が走っていた。

技術漏洩を防ぐため学園都市内に一通りのプラントを揃えているせいだろ。学生が多いのもちろんだが、決してそれ以外の一般人が住んでいない訳ではないのだ。

バイクさえあればすぐに移動できるんだが。　　ぼやいてようやく、

圭介はバイク修理の交換条件にいて思い出した。とはいえ、やることは変わらないのだが。

何気なく視界を広げ、傍から見れば機嫌悪く周囲にガンを飛ばしながらゲームセンターを探す。ものの、圭介の目はどこか虚ろでいた。心ここにあらず、といった風体だ。

バイクに乗りたい。すつきりしない気分が晴れてくれるような気がしたのだ。

面白くない。なかなか刺激的な体験が続くものだからつい忘れがちになるのだが、面白くないことも少くない。昨晚の倉庫の喧嘩も、今朝のじゃれあいもだ。

拳を振り回すのは大好きなはずなのに、ここに来てからは随分と面白くない。わけのわからない理屈をゴネられたり、不完全燃焼に止められたり。

やはり好き好んで学校と勉強の街に来るようなインテリの考えはわからん。

嘆息して、圭介はふと視線を留めた。近付いてくる。人だ。

長髪を後ろでまとめた女で、どうやら年上。動きやすそうなジャージで身を固めている。

立ち振る舞いから、相応に“できる”部類の人間だろうと直感する。

「ちょっといいじゃん？」

「あー？　すげーじゃん」　胸が、とは敢えて言わない。

「はあ？　……とにかくここぞでなにしてるじゃん」

「ぶらついてるんすけど」

「学校は？」

「あんなもんに喜んで行くナリに見えるかよ」

一瞬、圭介の脳裏を映像がよぎった。

おぞましい記憶だ。

箱詰めの世界の思い出。黒い板に難解な文字がズラズラ並び、それは手元の本にまで及んで脳髓を破壊せんと五感に襲いかかっ。

「あんなトコ行くかああ！」

つい、語尾に力がこもってしまった。

「ほほう。剛毅じゃん」ジャージ女は眉をひそめた。「ちよっと向こうまで来てもらうじゃん。みっちり指導してやんじゃん？」

「しっ……シドー？」

しどう。死道……っ!?

まさかこの女、特殊な拳法か暗殺術の使い手なのか？ またよくわからん理由で喧嘩ふっかけられているのか？

思わず体に力が入り、身構えて拳なぞを握ってしまう。臨戦態勢。ジャージ女は口端を上げた。

「やる気じゃん？ まあ、私はそういう威勢いいの、嫌いじゃないけどね」

「けっ」

死なば諸共。毒を食らわば皿まで。オーバーヒートまでアクセル全開。

今更どころできない状況だ。どうせ倒してもまたイヤな気分になるのだろうが、背に腹は変えられない。

せめて、スッキリしてからイヤな気分になってやる。

意を決する。圭介は足で歩道にすり合わせ、未だに雑誌を脇に置いたまま、固めた左拳を上げる。

ジャージ女は身を屈めた。特有の緊迫感が周囲に広がり。

「あっ、おにーちゃん！」

ふいに圭介の腕が絡み取られた。

「すみません。おにいちゃんってば口下手で。私たち、転校の下見に来たんです。でもおにいちゃん、学校より街並みに興味があるって勝手に」

まさに殴り合おうとしていた瞬間に言葉をマシンガンのように乱れ撃たれ、ジャージ女も圭介も、呆然と目を丸くした。

否、圭介が呆けた理由はジャージ女とは少し違っていた。

見覚えがあったのだ。彼女の銀色の髪に。

「ほら、いくよおにいちゃん?」

質問を投げる前に左腕を引っ張り 明らかに体格の勝る圭介を文字通り引きずるほどの力で ジャージ女の手から抜き出した。虚を衝かれたためか興が殺がれたのか、ジャージ女は追ってこない。だがそれでも、圭介の腕を引くことを止めない。

「なんのつもりだ」

「意味が不明瞭なため返答できません」

機械的に、丁寧に聞き取りやすく抑揚のない声が返ってきた。

一連の流れを体感しておいてなんだが 喋れるのか、こいつ。

「あんた、俺をどこに連れて行く気なんだ?」

「目的地を指定してください。お連れします」

「あー? ならゲーセンとか」

「ゲームセンターという認識でよろしいでしょうか?」

「お、おう」

「了解しました。検索します。検索完了しました」

「早っ! 凄いなあんた」

「こちらです」

ぐい、とまた尋常ならざる力で引っ張られた。無駄に抵抗すれば片腕を持って行かれると直感し、大人しくこれに従った。

迷いのない誘導に足向きを任せ、圭介はじつと腕に抱きつく銀髪を観察した。

落ちて着いた碧い瞳に白い肌。それらは一見して欧州貴族の令嬢を思わせた。

しかし優美な四肢を隠すのは平々凡々なセーラー服で、耳元には正にプロ用といった風のヘッドホンらしきものをはめている。

なにより長身の部類に入る圭介を悠然と連れ歩く立ち振る舞いは非常にパワフルである。これでは中学女子格闘家の印象を与えかねない。

もちろん、圭介はこの銀髪がそんな規格に収まりきる戦闘能力でないことを知っていた。

なにせこれは、圭介に巻きつくこの腕を無骨なガトリングに変形し、情け容赦なく冷酷に命を獲りに来るメタルヒットマンなのだ。ターミネーターと言ってもいい。

今の圭介なら、“そいつは未来からお前を殺しに来た殺人口ボットだ”と言われたらその瞬間に信じただろう。

「おい」

無反応。

今更ながら　まさかこいつ、人気のない所に連れて行ってゼロ距離から蜂の巣にする気じゃ　絶望感が圭介に襲いかかった。

腕を捨てる覚悟で逃げるにしても、土地勘がないこの学園都市では逃げ切れない。

片腕では昨日のように迎撃も十分にできないかもしれない。

結局、従うと決めてしまったのだ。最後まで従うしかない。

せいぜい祈るか、と圭介は深くため息をついた。

「あつ……と。たしか、けいすけさん？」

ふいに呼ばれて、圭介は半目を向けた。また見覚えのある花畑である。

いよいよ年貢の納め時か、と少しだけ考える。もちろん、それは決して肯定できるものではないのが。

「っおおー……？　昨日の花の子」

圭介は足を止める。花畑を頭に飾り付けたセーラー服の女の子が手を振っていた。隣にも髪の毛の長い、同じセーラー服の女の子が付いている。ほどほど今日はセーラー服に縁があるようだ。

「はい、昨日は……って、花の子って意味ですかあ!？」

「悪い。借りと貸しのある顔は覚えてるんだけどよ。名前はイマイチでさ」

頬を紅潮させて頭を押さえた花の子に、圭介は素直に詫びを入れた。

花の子は不満げに圭介を見据えたが、すぐに「まあいいですよ」と話題を切り上げた。その意を汲んで、圭介も違う話を振る。

「さつきサツでもないのに職質されたんだが、もう下校なのか？」
「あー、大覇聖祭前ですからね。少しいつもより警備が厳重になっているんだと思います。学生は準備もあるので、私たちの学校は早めに終わりにになりました」

「午前だけか……そういや、昼間に帰るのってテンション上がったもんだっけ。いや懐かしい」

「そうですね。それ、私もわかります」

子供っぽく笑う圭介に花の子のお供は、ずい、と身を前にして賛同した。長い髪が揺れ、肩を抜けて地面に垂れる。

「去年なんか、弟と一緒に下校しました。どういいうわけか、帰る前にお弁当持たされて」

「おおーっ。話せるな嬢ちゃん。あんたも花の子とまとめて奢ってやろっ」

「いいんですか？」

「何度も聞くなら奢んねーぜ」

「ところで」

花の子がひよつと背伸びして、圭介の体の影に視線を向けた。

いつの間にか隠れていたようだ。普段周囲の気配で行動を判別する癖がある圭介には、どうも動向を掴みにくい。

「そちらの女の子はどなたですか？」

「ああ、こい」

体の影に自らも目を向けた瞬間、腕が常軌を逸した圧迫感に襲われた。

肉を貫く一歩手前で硬直する鋼鉄の指。押しつけられた妖美なボディ。伝わる人並みの体温が逆に恐怖を刻み込む。

これは警告だ。バカな圭介にもわかりやすい肉体言語。

口をしつかりと閉ざして最善の一手を探し求めるも、やはり見つからずにただただ嫌な汗を垂れ流した。

「まあ、にいつたら。はずかしがっちゃってえ〜」

こいつなんか呼び方変えやがったマジ意味わかんねーぞ、と言う

ツツコミを呑み込みざるを得なかった。下手を打てばギャラリーの前で片腕四散というグロテスクな絵を見せつけかねない。

「私、このとおりにいの妹。ニルフていいいます。よろしくね」

どう見たら妹なのか誰か教えてくれ。

ニルフと名乗った自称妹は甘ったるい声で鳴いて、ふわふわした銀髪を圭介に擦り付かせた。甘い香りが鼻につく。昔嗅いだ覚えのある匂いだ。

花の子はニルフの自己紹介に笑顔で応え、お供の嬢ちゃんは意外そうに首を傾げつつも花の子に倣う。

明るく可憐な彼女達の振る舞いをよそに、圭介はさり気なく頬の冷や汗を拭った。

これで身の安全が保障されていれば、最高なものな。これ。

圭介の意を理解できる人間は、残念なことにその場にはいなかった。

次の日・昼 「12:30」 「よくわかったな。マブダチのセリフだ。イカ

「おふたりは本当に仲がいいんですね」

んなわけねーだろ、と返しかけた圭介の左腕が低く軋んだ。明確な敵意を傍にしていることを思い出し、反射的に口つくむ。

「兄弟で仲がいいなんて羨ましいな。ウチはしょっちゅう喧嘩してましたよ」

「だって私、いにいのことが大好きだもん。ね？」

鉄腕を念入りに圭介に絡みつけ、ロボ子改めニルフはごく自然な笑顔を浮かべた。どの口でそれを言うんだ、こいつは。

泣きたい気分になって、圭介は気付かれないように嘆息した。

小一時間この調子である。その理由は、バカな圭介にもなんとなく理解できていた。

より自然に圭介を拘束するためだ。ニルフにとって“人がベタベタしていて自然な間柄”というのが、これなのだろう。もっとも、それが本当に正しい世論なのかはわからない。

ただ初春と佐天さんの若干引き気味の反応を伺う限り、あまり安牌とは言えないようだ。

とにかくこの小一時間、べったりなのである。それだけならまだしも、時々ホールドを強めて痛み付けプレッシャーをかけてくるものだからたまったものではない。

数十時間ぶりの消費期限の切れていないまともな食事のはずだが、なかなか喉を通りにくい。防衛衝動が異物の受け入れを拒否しているのだ。圭介の意思とは関係なく。

指先を細やかに操り、フォークの先にスパゲティを絡めた。

昨日の喧嘩で削られた体力の回復のためにも食べるべきで、朝食の粗末な弁当だけではとても足りず、実際空腹なのにも関わらず。

ああ、ちくしょう。

試しに思い切りぶん殴ったら動くの止まんねーかな、と悪態混じ

りでニルフを見やった。鉄の笑顔が返ってくる。人のそれと寸分違わぬ可憐な表情だ。

見ていると圭介の反骨精神に火がついた。

「伊吹さん、あまり食べませぬね。食欲ないんですか？」

佐天さんに首を傾げられて圭介は生返事を返し、フォークをニルフの口元に運んだ。

ニルフの笑顔がふつと消える。意外そうにきよとんと目を丸める。傍から見れば、そんなところだろう。

人間らしい、それも女の子らしい可愛げのある自然な仕草だ。

「やだ。にいに、食べさせてくれるの？ あーん」

食べれんの、と問いかける隙を与えない。口を広げ、そのままフォークにかぶりついてきた。

(フォークごと食わないよな、こいつ)

懸念もつかの間、フォークはニルフの口からつるんと抜けた。フォークには傷ひとつ無い。

ほくほくと頬を膨らませ、満足そうに顔を緩めている。

「……うまいのか？」

「もぐもぐ んむ。ミートスパゲティは私の大好物だってににも知ってるでしょ？ もう。恥ずかしがって。かわいっ」

(いや知らねーから)

声には出さず圭介はまた淡々と丁寧に、かつ念入りにスパゲティをフォークへ絡めた。

相手はロボットだ。気のせいだとは思うが “ 自然に食べる ”

間、圭介にかかる重圧が表情と一緒に緩和される…… ような気がしたのだ。

フォークを差し出されると、つられてニルフは口に含んだ。スパゲティをつるりと抜き出し、実に美味しそうに食べてみせる。

もしかしたらこれは、ある意味で“負け”になるのかもしれないが 極めて、非常に、爆裂にかわいい。思わず圭介の口元も緩んでしまう。

「……にいひ、ちよつほ、ほろほろ、ほほすき」

「い、伊吹さん？ 妹さん嫌がつてますよ」

「……だよな。クソ」

「うわぁ……」

本気で悪態をついた圭介を見やり、佐天さんは乾いた笑いを浮かべた。半分以上を平らげたフルーツパフェの生クリームを掬い少し考える素振りを見せてからニルフに差し出す。

「こつ、こつちも食べる？」

「佐天さんまで……」

呆れたように肩をすくめる初春に、佐天さんはあつけからんと「だつてかわいいから」と笑つてみせる。

ニルフはよく噛んでスパゲティを飲み込んでから、佐天さんの差し出したパフェを口に入れた。

「うっわ〜食べましたよ！ なんかこつ、グツと来るものが……」

「クソツ！ 俺のスパゲティは食べないってのか！ ナポリタンだからかそうなのか!？」

「ふたりとも、その、ここファミレスで、他の人もいますから、落ち着いてください……」

初春に宥められ、圭介と佐天さんは平静を取り戻した。

そして圭介は都合よく、初期に向けられていた敵愾心をきれいさっぱり忘れ去っていた。残ったスパゲティを瞬く間に胃袋へとぶち込み、頬杖をついてむくれてみせる。

「そういえば妹さんはなにも頼んでませんね。どうしてです?」

「あー、そりゃあ」

投げやりに答えかけた瞬間、圭介の左腕が尋常ならざる力に極められた。油断していた圭介は思わず飛び跳ねるのを、どうにかこらえた。

「私ダイエツト中なの」

暴力的な手段で圭介を封殺した割に、可愛げのある理由で返答した。

続く「えゝそんな太つてないじゃん」から始まる一連のガールズトークを軽く無視し、圭介は一心不乱に冷水を飲み続けた。

疎外感云々以前に、単なる保身が目的である。次に失言すれば今度こそ骨を粉碎されかねない。復活した危機感と緊張感が圭介にそう告げていた。

死んだ魚のような目に戻って周囲に見渡し　ふと、圭介はあることを思いついた。身を寄せているニルフに耳打ちする。

「ちよつとトイレ行きてーんだけど」

「拒否します」

声のトーンを落としてニルフが返答した。表情は気力的で柔らかいものであるのに反し、冷たい声質である。

「ちなみにこの店は男女別だ」

「既知です」

「ならどうする」

「拒否します」

「これ以上人の目引く気が。ロツクだな」

「ロツク……ですか？」

圭介にしてみればただの軽口だったのだが、予想外にもニルフは笑顔を僅かに歪めた　ように見えた。

「もー。わかつたわよ」

途端にニルフは圭介の腕を解放した。ちよんと小突いて圭介を促し、朗らかな笑顔を振りまいた。

それは、世界中の男共を恋に落とすかのような、とても魅力的な笑顔だった。

「はやく、もどってきてね？」

* * *

洗面台に顔を突っ込み、水道水で頭を冷やす。

僅かだが、ニルフから離れられた尊い機会なのだ。無碍にはしない。可能な限り緊張の糸を緩めなければ。

「おい長エぞどけ」

呼ばれて、圭介は洗面台からノロノロと頭を引いた。怪訝な顔で声を見やる。

普通の男だ。目つきの悪い茶髪の男。しかしそれ以外に取り留めて特徴らしい特徴も見当たらない。

だが前にしていると、どこことなく“異質感”が鼻につく。言い換えれば“存在感”や“求心力”とも取れるだろう。

「あー、悪いな。ちよつと気合い入れ直してたんだ」

金色の蛇口を閉じて水を止め、圭介は素直に頭を下げた。

謝罪のセリフを怪訝に思ったのか、男は「はああ？」と不機嫌そうに顔をしかめる。その仕草は、圭介の知る“喧嘩の売り方”によく似ていた。

「まあ、文句はねーよ。我慢比べも戦いだ。もっとも今のは誇りの賭け甲斐もないし、ゲンコの方がシンプルで好きだけどな」

「誇りだあ？ なに言ってるんだお前」

男は嘲りを含んだように物を言う。

圭介にとつては懐かしさすら覚えるその立ち振る舞いに、思わず微笑すら漏れてしまう。

「ロクに拳も握ったことのないガリ勉にや、わかんねーかな」

「んだと？」

「頭良さそうだからな。できないと思つたら血イ吐いてでもやり遂げる！ ……なんて、思わんだらうよ」

「つたりまえだ面倒くせエ」

「けどよ。退けないんだ、誇りを持つとな。たとえ無理でも逃げられない。自分の世界を守るために、ゴールしなけりゃ終われない」

「くだらねえ。馬鹿で阿呆で世の中を知らず融通の利かないガキの生き方だ。努力や希望なんてものを未だに信じてるのか？」

男が吐き捨てた。圭介を見返す切れ目から、侮蔑の色を嗅ぎ分けた。

くだらない。そうだろう。言った圭介もまた内心で賛同した。人は小さい。だからその人間の世界も小さい。共通項がなければ、ほかの世界など簡単に理解できないものだ。

現に、圭介にしてみれば進級や成績のために必死になっている学生の世界観はよくわからない。

重要なのは、世界を愛すること、誇りを持つこと。そしておそらく、理解するよう、理解されるよう努めることだ。

「……信じてないのか？」
「愚問だな」

「でも面白い。それに、無理って思ってたのにできたら凄いだろう？」にしし、と男の嫌う子供のような笑い方で圭介は口端を歪めて牙を光らせた。

男は一瞬苦々しく顔をゆがめ、それを吹き飛ばすかのよう失笑を漏らした。

「非論理的だな、ガキの理論だ」

「あなたの頭は理論だけで動くのかよ。メカか？ 装置か？ ロボット様か？」

「……その方が楽だ。賢い生き方のはずだ」

「魂のまま歩め。それは正しいお前の道だ」
言った圭介自身、少し驚いていた。

やや哲学的この言葉は、当然ながら圭介のものではない。昔、友人 親友と形容して然るべき彼から贈られたものである。

小難しい彼の言葉を意味まできちんと心にとどめられていたのは、上等な頭を持たない圭介にしてはひどく珍しい。

そのせいか、あの時代のことは未だ風のおいまで圭介の魂に刻まれているのと自負しているが、彼の言葉はあまりよく覚えていな

い。

逆に。

こうまでよく覚えているということは、それだけ今の基幹となっている　ということだろう。

「誰の台詞だ」

「よくわかったな。マブダチのセリフだ。イカスだろ」

「言っつてそんな気の抜けた間抜け顔を晒されりゃあ、誰だつてわかる。誰だつてな」

「そうなのか」

「そうだ。気づけ馬鹿が」

ははあ　生返事を呟き、圭介は間抜けと揶揄された自分の顔を手で触れた。

頬は少しばかりザラザラした。弾力は弱い。あまり肉付きはよくないかもしれない。

「だが……なるほどな。面白ェ」

「へ？」

「魂のまま、か。悪くない。いい言葉だと思っぜ」

「　　だろ？」

また子供のように強く笑う圭介に、男もまた微笑を返した。

それは端から見れば人を小馬鹿にしたような笑い方だったが

屈託のないものだと思感が告げていた。

自然と圭介は右手を広げ、男に差し伸べていた。

「伊吹圭介だ。ここには明日まで滞在してる。ここも……えっと、運動会？　で忙しいらしいが、時間があったらまた会おう」

「ああ。悪くない」

男は圭介に応じ、右手を握り返した。

「俺は

* * *

い、伊吹さん？」

目の前が真っ暗になった。舌先には砂利の触感。アスファルトの冷たさが肌を刺す。膝が痛む。頭もだ。

どうしてこうなった？

記憶を辿る 辿れども、わからない。

なぜ、自分は街中で倒れているんだ ?

「そ、その……立てますか？」

「ああ……」

気の抜けた声が出た。

ノロノロと上体を起こす。抵抗感はない。痛みもとりとめて強いものはない。

それだけに衝撃だった。

例えるなら、エンジンの整備中にボルトが1本見つからない時の感覚。問題なく始動するが、堪らなく不安を掻き立てられる。

呆けている圭介を見かねてか、右手がすつと差し出された。昨日あつた覚えがある。ツンツンした太陽頭の少年だ。

「とうま、だったか。卵、旨かったか？」

「それが……不幸なことに昨日のガス爆発でコンロは役立たず、電気も止まって冷蔵庫もおしゃやかでして。生卵のまま、かつ腐る前に食べなきゃならない事態になっちまいましたね……」

ガス爆発。

反芻する。ガス。爆発。

昨日の顛末がフラッシュバックする。

爆発。漏電。炎上。吹き飛ばすバイク。散りゆく倉庫。燃え尽きる積み荷。飛び散る火の粉。出来上がるホップコーン。

(あれのせい……か?)

ずん、とまた一段階圭介の気は重くなった。

「代わりの食材買おうにも、どこも昨日の原因不明の倉庫爆発事故で品薄状態で。でも上条さん的には腐りかけのタンパク質があるだけ幸せなわけで。ははは……」

肩を落とす当麻を前に、謝罪の言葉すら圭介は呑み込んでしまった。下手に謝る以上に、彼には物資、すなわち食材が必要なのだ。

「泣くな。なんか奢ってや」

言いかけて、はたりと気が付いた。

無い。財布。

愕然として、或いは納得した。

駒場から受けた依頼 “被害届の出せない不良を標的にしたスリ” を捕まえて欲しい を思い出す。

例の“犯人” とやらにやられたのだ。

あろうことが、この伊吹圭介が。“虎殺し” の異名すら持つ圭介が。

右手に激痛が走る。無意識にアスファルトを殴りつけていた。昨日ニルフをどついて以来、壊れかけだというのに。

「伊吹さん？」

顔面が痙攣している当麻をキツパリと無視した。圭介は腹の底から呪詛を呟く。

拳を固く握りしめ、血走った目でひび割れた地面を睨みつけた。

「叩きのめす……ッ！」

「はて面妖な。だまし討ちはぬしらの得手じゃろう」

据わった視線を走らせた。

覚えのない白装束のフードから垣間見える淡い黄の毛並みは記憶に深く刻まれたものと相違ない艶やかさだ。

「てめっ、化け狐！ なんであんたがここにッ！」

「まことに面妖な。ぬしが立てる大地に、わっちが至れぬ訳がないであろう？」

袖で口元を隠し、上品そうに“化け狐” が笑った。

ゆらゆらと圭介は立ち上がる。和やかな“化け狐”の表情に流されぬよう目と鼻の距離で顔を合わせ、怒気の矛先を突き刺した。

「まさか、あんたが俺になんかしたんじゃないやねーだろうな。できんだるあんた。記憶消したり意識操ったり」

「ぬしの下賤な脳髓がひらめく程度のイメージは容易に具象化できるに決まっとうろ。……が、知らんの」

「知らんだあ？ 喧嘩売ってんのかオイコラ泣かすぞワレコラ」

「ぬしに術をかけたことなどありはせん。それと、口調が現役に戻つとる」

「あ、あのー……？」

“化け狐”に向けていた視線をそのまま走らせた。殺意にも似た激情に貫かれ、当麻の顔が蒼白に抜ける。

「んだよ、ああ？ あんたがやったんか？ んなにユメが見てーか、ゴルアああッ！！」

「違う！ 違います！ 違うんです！ 断じて！ でもそっちの女の方はさっきまで俺と一緒にいたんですマジで！」

「……ちっ」

悪態をついて、圭介は目を伏せた。今の状態では、目を合わせれば意図せず威圧してしまう。

そう、わかっていたことだ。

この“化け狐”は決して嘘をつかない。嘘について喜ぶような感情は持ち合わせていない。

長い年月をかけて、この狐の全ては熟成し腐敗すら始めているのだ。知識に然り。力に然り。その魂に然り。

「ではどうする小僧。泣き寝入りかえ？」

「ざけんな狐。寝言言うにはオメメパツチりじゃねーか。どつきや治るか？」

「変わらないのう、小僧」

薄笑いを浮かべる“化け狐”は圭介の頭へと手を伸ばし無遠慮に撫でまわ

「やめるコラ」

寸前で、圭介は悪態とともにすぱんとはたき落とした。

鼻を鳴らし、しかし内心の闘争心は抑えきれず獐猛に笑った。天を高く見上げ、拳を強く握り締め。

「いくぞ待ってるクソやらあああああああああああああああ
あっ！！」

腹の底から、高らかに声を張り上げた。

それは、宣戦布告と呼ぶには相手の輪郭が酷く不鮮明で、意識表明と言うには言葉が圧倒的に欠如している。ただの感情を乗せた雄叫びだ。

しかしながらその意は正しくその場を満たし、包み込んでいた。圭介の存在、あるいは世界、あるいは魂に染め上げられたのだ。

その圧巻の野性と闘争心の奔流を前に上条当麻は乾いた笑いを漏らし、“化け狐”は相も変わらず微笑んでいた。

次の日・昼 「15:00」 「理解不能。詳細情報の開示を求めます」

「 っ て訳だ。手伝え」

腕を組み、慥然とした態度で圭介は告げた。ぽかんとした表情で初春は首を傾げる。

やや不満そうに（端から見える）ニルフは頬を膨らませ、圭介の二の腕に抱きついた。にいにいと連呼するニルフに眉をひそめる旧知の“化け狐”に、圭介は視線で合図（殺気）を送って封殺した。

視界の端では、会計の立て替えをお願いした当麻が泣いていた。

「時間がねーんだ。情報集める。潰しに行く」

「……できません」

圭介の威圧的な要請を、初春はピシャリと突っぱねた。圭介を見上げる形で、しかし凜と声を張り上げる。

「風紀委員でもない、まして学生でも能力者でもない人に協力は仰げません。 それでなくても暴力前提のあなたなんかに！」

圭介の経験則が告げる。論で彼女を退けるのは不可能だと。譲れないものがあるのだ。あの小さな体の中に。

か細い腕に力を込めて、今にも殴りかかれるよう拳を握る圭介と向き合い、立ちふさがっている。

誰との誓いとも約束とも圭介にはまるでわからない。

だが、確かに刻まれている。この頭の花畑でかわいらしく着飾っているような小柄な少女に。

圭介に立ち向かうだけの理由 “誇り”が。

「ハッ、時間ねーってんのに。でもこれじゃ、しゃーねー……なあ！」

怒りに押された闘争心が好戦的に牙を光らせた。

この街に来て、今までで最も拳を振るうに足る相手だ。心踊

らずにはいられない。

たとえ相手が、この目にどれだけ弱く映っているとしても。

びくりと初春が体を震わせ、さりとて退く様子はまったく見せない。圭介は拳を握り、腕を上げ。

「おい。待てよあんた」

標的を塞がれた。財布の中身に見切りをつけた上条当麻が初春を背に隠し、憤りを露わにして圭介を睨みつけた。

「相手はこんな女の子だぞ？ あんたはこの子を、平気で ツ！」

「女子供は殴らない。確かに俺の流儀のひとつだが、相手が牙を持つてゐるなら別だ」

当麻の正論を流すように圭介は手首を軽く払った。怒りに任せて力みすぎた牙を研ぎ直す。

「こいつは誇りに賭けて世界を守る。こいつの世界だ。そのための牙も持つてる。そうだろ？」

牙。

怪訝そうに目を細める当麻の後ろで、初春はその言葉の意味を確かめるように反芻した。

顎に指を置いて考えを働かせるような素振りを見せ ふういに、ハツと目を見開いた。

「……伊吹さん」

「どうした？ 充電でも終わったのか？ んじゃもうさっさと」

「もしかして、私も御坂さんみたいにビリビリできると思ってます？」

「えっ」

違うの？

目を点にして、圭介はよろよろと後ろに2歩3歩と退いた。いつの間にか拳は完全に解かれ、全身に帯びていた怒りの覇気はなりを潜めていく。

「こっ、この街じゃ……みんな喧嘩でカミナリとかビーム出すんじゃない、ね……の？」 「いや、ないから」 「」

初春も当麻も、今まで沈黙していた佐天さんすら口を開き、異口同音に否定した。

今にも周囲を叩き潰しかねなかった圭介のエネルギーな闘気は瞬時に消え去り、圭介はその場に両膝をついた。そうして自身の両手に力なく視線を落とし「嘘だこんなこと」とぶつぶつ呟き続ける。律儀にニルフは抱きついたままだ。苦しい体勢だろうに。

危ない薬の依存中毒のような（ある種その例えは正解である）その有り様を見かねてか、佐天さんは圭介の肩をぽんと叩いた。

「だつ、大丈夫ですよ。………。そ、そう！ 風紀委員のデータベースなら私が初春に頼んであげますから！」

「佐天さんに頼まれたってダメなものはダメです。御坂さんみたいな風紀委員の現場協力ならともかく、こんな暴力的な人に情報提供なんてできるわけないじゃないですか」

瞬く間にバツサリ切り落とされて、佐天さんもまた肩を落とした。意気消沈したふたりを見てか「ああでも」と初春は言葉を加える。「事件は事件ですから、被害届を出してもらえれば風紀委員で捜査します。学園都市から出てもお届けしますよ」

初春から事務的に宣言され、しかし圭介は位を返さず光の失せた目をアスファルトに落としたまま、微動だにすらしめない。

正気を疑った初春が、恐る恐る手を伸ばす。

「あら、初春」

ひくりと指先を震わせて、初春は視線を圭介からよそに動かした。御坂さんに車椅子を押され 制服姿の黒子が訝しげにこちらを観察している。

仮に。

仮に、経緯を省き今だけを切り取るならば、さしずめ。

“ 奇妙な白装束の女性がやや遠巻きに様子を窺われ ”。

“ 佐天さんと圭介が路上で人目もはばからずに落ち込んで ”。

“ 圭介の腕には無理な体勢で謎の女性ニルフが抱きついており ”。

さらに“ その傍で老輩する当麻 ”に。

その隣で“なぜだが説教をくれている初春”という図式だ。

ありていに言っていてこれは、奇妙である。

異様と言い得るほどの異質感もなく、しかし普通と断ずることもできない微妙な　ある種絶妙な空気感。

どう説明しようかと慌てふためきはじめて初春をよそに、ようやく圭介の体に生気が戻った。

ふらふらと立ちあがり　じろりと初春に視線をぶつけた。

「御坂さんならともかく」って……どうということだ？」

それは、昨晚のアクションが嘘のような、誠に愚鈍な反応だった。

* * *

「　はい。感度良好ですわよ初春」

イヤホンマイクと応対する黒子を横目に、圭介はぐるりと辺りを見渡した。

行き交う学生の数はかなり増えてきていた。例の運動会　大覇星祭と言っらしいが　の用意でてんでこ舞いなのだと言っ。

保護者などの外部の人間を多く招くにあたって備えておくべきこと、見せたいものを整理する必要があるのだとか　。

当麻と御坂さんの学校での近況に耳を傾け、やはり学生は大変だな、と圭介は内心で呟いた。

「ウチの委員が厳しくてさ。今日だつて結構人使いも荒いから隙を見て逃げてきたんだ。そしたら……くっ」

「常磐台はあの通りだから授業もあんまり短縮されないのよね。準備はそこそこ楽しいけれど、帰りが遅くなると寮長が……アレで」

聞いて、圭介は小さくため息をついた。

自分で選んだ中卒フリーターの道だが、やはり高校生活の話をされると、少しばかり寂しく思えてしまうのが常である。

「楽しいか？ 俺は面倒なだけだよ」

「マジで言ってるんならマジどつくぞリア充」

気怠そうに肩をすくめた当麻の頭をわし掴み、圭介は鼻先が擦り付きそうなほどに顔を近づけた。

明らかに戸惑いの色が濃い当麻を、確たる敵意を乗せて睨み付ける。

「テメーにゃわからんかもしれんがな。穴掘って土運ぶ職場にスケなざいねーの。おっさんばっかなの。汗とオイルとオヤジの怒鳴り声しかねーの。なのにテメ、女の子に囲まれて面倒ってコラ。しばいて海に捨てんぞオラオラ」

「お、おう……ごめんなさい」

「よかるう」

無造作に当麻から手を離し、しかし目は逸らさない。

腑に落ちないと言わんばかりの表情で凄まれ、当麻は反射的にたじろいた。視線を泳がせ助けを求め。

「……っていうか、あんたにもいるじゃない。妹さん」

ビリビリがそれを受け止めた。

指摘された左腕の重さを一層感じる。しかし左腕に下がるそれと目を合わせる訳にはいかない。圭介は当麻を睨み続けた。

店内トイレにいたはずの圭介だが、いつの間にもやら裏路地で当麻に叩き起こされたのである。

無自覚だが時間も当然徘徊分経過しており「はやくもどってきてね？」という約束を完全に反故したことになる。無論圭介の意図ではないが、ニルフにとってみれば“どっちでもいい”ようだ。

暴力だけでは拘束力が足りないと判断したようで、こうして無言で訴えることで精神的に追い詰めようと画策しているらしい。

もっとも、今まで人前でしか猫なで声で甘えて来なかった手前、

あまり効果とは言い難い。

「こいつを数に入れんな」

“ロボを女扱いすんな”という意味合いで口にしたのだが、ビリビりは別の意味で受け取ったようだ。「兄弟ってやっばそんなのね」とひとりで頷いた。

「……白井さん？ どうですかー」

いよいよ当麻は圭介の睨みに耐えきれなくなって、今度は車椅子の黒子に目を向けた。

耳元を押さえ、黒子はマイクと言葉を交わし何度か頷いてみせると、視線を上げて当麻に合わせた。

「伊吹さんから提供していただいたスキルアウトの被害状況と現場の情報と照らし合わせると、この第七学区での再犯の可能性が最も高いと思いますわ。」

ですが揃いも揃って“事件前後の記憶がない”となりますと「精神操作系の能力者の仕業ってことか」

黒子の言葉をビリビリが引き継いだ。黒子は首を縦に振って肯定する。

「でもそれだけの能力者ってことはレベル3以上だろ？ 相当絞れるんじゃないか？」

「んなことより事件時間前後の監視カメラでも見りゃ一発だろ」

当麻と圭介が口々に考えを吐露した。そのいずれにも向け、黒子は否定の相槌を打つ。

「現場は第七学区に絞れたといっても周辺のカメラをチェックするとなつたらかなり手間ですわね。」

それと、伊吹さんの症例を見る限り相当高ランクの能力者であることは予想できますが、確実にこれを実行できる人物と言いますと……」

「知ったことか」

思考する黒子を制し、圭介は指もとに力を込めてバキバキと関節を小気味よく鳴らしてみせた。

当麻への八つ当たりに近い怒りの念も消え去ったようで、表情は好戦的に歪んでいる。忙しい男である。

「ならトイレでも張って怪しい奴全員ボコってしよっぴけば当たるだろ」

「冤罪いくつ生む気ですのこの猿人類は……」

やれやれと言った風で黒子は片手で顔を覆ってみせた。ふいに圭介を無遠慮に指し、悠然と宣告する。

「今のあなたはあくまで“まだ十分に動けないわたくしの現場協力”です。関係のない学生を傷つけることは許しませんわよ」

これだから胸が貧相なガキは 内心でのみ毒づいて圭介は身を翻した。何のつもりか、未だ遠巻きにこちらを伺っている“化け狐”と目があった。脊髄反射的に中指を立てる。“化け狐”は微笑を崩さない。

「……なあ、伊吹」

「んだよ」

「結局なんなんだ、あの人」

「ただの狐だ。イナバノヨーコとでも呼んどきゃ通じる。不用意に目を合わせるな呪われるぞ」

「はあ……」

二言三言続けたそうな当麻を無視し、やはりこちらを楽しそうに伺うだけの“イナバノヨーコ”に、今度はサムズダウンを送りつけた。それを契機に圭介はありとあらゆる挑発的なジェスチャーを繰り返す。

「黒子。その能力って」

ビリビリが意を決して車椅子の黒子に視線を向ける。黒子は極めて真剣な表情で頷いた。

ビリビリは嘆息して「やっぱりそうよね」とひとりごちる。

重くなる場の空気をさすがに無視し切れずに、圭介は身を翻した。黒子とビリビリを順に見やり、最後に当麻で目を止める。

「リア充。通訳しろ」

「ええっ？ …… つと、つまり、あんたにかけられたのは記憶操作と精神操作だ。ふたつの能力が高いレベルで使われてるってことだろ？」

解説の正否を確かめるように、当麻は視線をビリビリに向けた。神妙な顔つきでビリビリは腕を組み、ややうつむいて前髪を揺らして。

「そう。 …… そして、精神系能力を高水準で使える能力者は、私の知る限りはたったひとり」

嫌悪感と倦怠感を混じり合わせた声色で、その名前を口にした。

「学園都市最強のレベル5、第五位“心理掌握” 食蜂操祈」

* * *

赤々とした夕陽が照りつけ、建物を暖色に染め飾る。

“セブンスミスト” という名のこの店舗は衣服を中心に品を並べており、女学生の行き着けの店のひとつなのだという。

その割に店の一区画が妙に新しかったり、目を凝らせば不思議な焦げ痕が残っていたりしている。

ナウなヤングにはこれがハイカラなのか、と圭介は勝手に自己完結しすぎさま周囲に気を配らせた。

「ったく、なーんで私がこんな猿人類とこんなところに。こうしている間にもお姉様が上条さんの毒牙にかからないとも限りませんのに……」

ねちねちと文句を垂れ流す黒子の車椅子を押し、しかし左腕は二ルフに拘束されたまま、圭介は黙って視界を広げる。

「いいですわね金色猿人類。性急に周辺店舗の安全を確認してここ

を去りますわよ。さつさと終わらせてちゃっちやと食蜂を押さえにいったお姉様と合流しますわよ」

生返事して、圭介はじつと一点を注視する。時折こうして隙を作ってみれば現場を押さえやすいのではないのか　と予想してのとだが、目に見えた成果は特にない。

歯噛みして、けれども別の建設的な方法は見いだせない。

馬鹿は愚直に鵜の目鷹の目で辺りを注意する他ないのだ。

「危険」

ニルフが耳打ちする。途端に頭上から衝撃が押し寄せた。

確認する。財布だ。圭介のものではない。ワニ皮の高級感溢れるデザインだ。見覚えすらない。

「人の話すらもまともに聞けませんの？ ……それ、返してくださいな」

「あんたの？　なんで頭の上には…？」

「天誅ですの」

「なるほど。あんたは本当に怒らせない方がいいみたいだな」

「わかればよろしい」

すれ違いながらも納得し合ったようで、圭介は素直に黒子の財布を手渡した。

黒子はなにか不満そうに鼻を鳴らし「さつさとパトロールですの」と先を促す。ハッキリと肯定の意を表して、圭介はまた車椅子を押ししていく。

左腕のホールドが心なしか強くなっているように触覚する。

おそらく気のせいだろう。たが痛い。なぜだ。

首を捻らせた圭介の鼻孔に刺激が走った。店舗を包むアロマの香りとも、黒子の髪から感じるにおいともまた違う。

“異質感”で覆い尽くされたそれは　そう。昨晚の喧嘩の最中に嗅いだものに近い。

自然をねじ曲げて作られたものにおい。言うなればこれは、奇跡のおいだ。

それを撒き散らし、体中を色濃く塗り固めている人間がいる。

「そこだ」

圭介の呟きに黒子は目を見開いた。今にも飛び出して行きかねない自分の体を、手すりに力を込めて押さえつける。

「……………どこですの」

低く黒子が問う。

圭介は歩調を緩めて視線だけを鋭く動かした。

「そこだ。左のふたつ向こうの棚の前にいるYシャツの男。今

ジャージ取った」

黒子は背筋を伸ばす。車椅子に腰掛けたままでは、背の低い黒子にはとても見えないが見ることはできない。

舌打ちして観察を諦め、深く車椅子に腰掛け直す。再び低く、押し殺した声で圭介に問いかけた。

「なぜ、その殿方だと？」

「勘」

「……………なに言ってるんですの？」

黒子は訝しく視線を送るも、圭介は決して意を返さない。ただただ自信たつぷりに断言する。

「目に覇気がない。なにより奇跡のにおいがする」

「奇跡のにおいって……………まさか、AIM拡散力場の変化でも嗅ぎ分けられると？」

「じゃあそれで」

「じゃあそれでってあなた……………ちよつと、なに押ししてるんですの」

「近づくんだよ。でなきゃどつけねー」

「ちよつと！ 行くならご自分だけにしてくださいまし！」

「連れてけ抜かしたのはあんただる。つか騒ぐんじゃねーようっせーな」

「これからまさに騒ごうとしてる方に言われたくありませんの！」

そんな具合に喧騒を交え、圭介はニルフに拘束されたまま車椅子を押ししていく。陳列棚の間を縫って、圭介の感性が黒と断じた少年

の前に躍り出た。

青い短髪にピアスという、広義的に不良と取れかねないファッションである。しかしそれ以外の装飾はないと言っていていいほど簡素な身なりだ。

なにより圭介自身が先ほど口にしたが、その出で立ちからは“覇気”が伝わってこない。

とてもじゃないが不良とは呼べない。せいぜい“女の子にモテたい一心で少し攻めたおしゃれさん”の部類だろう。

ともなれば、これは。

「あんたが犯人つてことか……！」

圭介の顔が歪み、露出した牙の先が鋭利に輝いた。拳に意図せず力がこもり、車椅子のグリップは嫌な音を響かせた。

「風紀委員ですの。そのあなた、非常に申し訳ないのですが少しお話願えますか？」

溜め息混じりに黒子は左腕に通した深緑の腕章をつまんだ。

男は依然として手元のジャージを吟味して。

「……どういうことですか？」

否。吟味などしていない。

目の焦点が手元に合っていないのだ。

まさに上の空といった様子。あたかもそれは遠くに意識を飛ばしているようでもあった。「シカトたぁいい度胸だ。それに免じて、

俺の最終奥義“黄金の七色コンポ”でその心臓をもらいっけ」

「おやめなさい。今度は財布ではなく私やその商品棚を頭上に落としますわよ……っっていうか意味分かりませんわその最終奥義」

じろりと黒子が目で威嚇する。圭介は視線を青髪ピアスから隣の棚に移した。

大きい。おおよそ今し方間を縫った棚の二倍強の高さと三倍の長さを誇っている。

黒子にそれが不可能なのか可能なかはまた別として、手枷ニルツの付いている今の圭介がそれから逃げるのはかなり苦しい。

逃げられない。本能が伝えた。

圭介は脂汗を滝のように流して絶句を続ける他なかった。

押し黙る圭介を妖艶に嘲笑し、黒子は視線を青髪ピアスに戻す。

「あなたのような見るからに馬鹿なブロンドの不良ならいざ知らず、普通の学生が風紀委員に呼び止められてこつまで傍若無人とは。おかしいですわね」

「ほう」

「難聴か本物か、でなければ 極度の集中を要するテレパス能力の種類の精神系能力の使用中、といったところでしょうか」

「てれ……ぱ……？」

頭をひねる圭介を一瞥すらせず「そろそろ面倒になってきましたわ」と黒子は肘掛けに頬杖をついた。

「例えば、あなたの頭に別の誰かが急に入り込んで体の主導権を掴まされていたとしたらどうなると思いますの？」

「わかんね」

「少しは考える努力をしなさい……！」黒子の怒気が左右に分けた髪を靡かせ、強い眼光が圭介を射抜く。「要はテレパス能力なら操られた間の記憶がない説明がつくということですよ！」

「ほう」

あまり黒子の説明が理解できないものの、圭介は一応感心したポーズを取った。

そして。

(ぬう?)

押し黙っていたせいだろうか。近づいたせいだろうか。はたまた黒子との会話で少し逆鱗の感情が弱まったせいだろうか。

少しだけ冷静になった圭介は、はたと気が付いた。

青髪ピアスの体を包む異質感のにおい、或いは色、或いは音、或いは波長は、青髪ピアスの肉体そのものそれとは似ても似つかない代物だ。巧妙に似せているが、根本的に異なる波長だ。

もしかすると、この“波長の模倣”こそが精神系能力の肝と

も呼べる要素なのかもしれない。

体を覆い隠す異質感の波長。ひた隠しにされた本来の波長。生氣のない体。

ならば、正解は。

「とにかくチャンスですわ。テキパキこいつを拘束　もし？　今度はどこに行く気ですか？」

「見えた」

短く答えて、圭介は車椅子を押しすぎてすぐ近くの窓際に寄った。昼下がりの大通りには学校帰りの学生で溢れかえっている。

これでは外にいたとしても、異質感の本元がわからない。

いや。

“見えている”。研ぎ澄ました五感と本能が伝えるのだ。

隠しようのない異質感のにおい。或いは色。或いは音。或いは波長を。

ガラスも空気も物ともせず、それは雑踏の中で輝いている。

いる。向かいの建物。女。金髪。リモコン　？

「いったいなんなんですか？」

「見えねーのか黒子。向かいのビル。三階。右から五番目のガラス　んト」

「三階って……スモークガラスではありませんの。適当なことを言わないでいただけませんか？」

「なら、金髪の女でリモコン使う奴って知ってるか？」

「……リモコンですって？　どうしてあなたがそれを」

ふいに、向かいのビルの金髪女が妖美に微笑んだ。スモークガラスで姿形は厳密に見て取れないが、異質感から伝わる気配がそれを顕著に示していた。

面白がっている。あの女は。無邪気に。この伊吹圭介に喧嘩を売っておいで。

「潰す」

明確な殺意を以て、圭介は宣言した。うるたえ騒ぐ黒子を遂に放

って踵を返す。

「注意」

ふいに耳元でニルフが口火を切った。圭介の左腕を強く引つ張り、今にも向かいの建物に乗り込む勢いよくの圭介にブレーキをかける。「あなたはどのようにして標的の所在と容姿を断定しているのですか？」

「勘」

「理解不能。詳細情報の開示を求めます」

「あーん？」

面倒くさげに頭を掻いて、圭介は周囲に視線を投げた。

「俺ほど魂のステージが高くなれば魂の色が見えてくるんだよ。たとえば」

適当に思いついた単語をそれっぽくつなぎ、圭介は人差し指を視界の端から端まで左右にゆっくり動かしした。

「そこそことそことそことそこ。似た波長の異質感がぶんぶんにおってくる。同じ奴に操られてんじゃねーの。よく知らんけど」

「理解不能。“波長”と形容される以上音や光に類されるものと推察できます。続く“異質感”“ぶんぶんにおって”の形容は適切ではありません」

「しゃーねーだろ。チカチカしてゴツゴツしてドンドンしてスンスンすんだよ。青くて粘っこくてうるさくてくさいんだよ。なんかそんな感じの感じがこいつらからだな」

カリカリしながら圭介は自分の本能について説明を重ねるも、ニルフはやはりわからないといった様子だ。

これはもはや天性のもの、感性の問題である。すんなり受け入れられなければ、いくら思考を重ねようが納得できるものではない。

とりわけ、ロボットのニルフには理解に苦しいのだろう。

「ちよっと……待ってくださいまし」

背後で黒子が上づつた声をあげた。

「あの青髪ピアスの殿方も……彼らも、操られていると？ 向かい

のビルのリモコンを使う金髪の奥方に？」

言葉にするのも面倒だと言わんばかりに圭介は片手を軽く振った。視野を広げる。ゆらりゆらりとこちらに近づくと、やや覚束ない足取りの学生。その挙動ひとつひとつに注意を配り、口元は意図せず緩み、夕差しで牙が茜色に煌めいた。

「ひーふーみーよー……あーっ、数えんの面倒だ。どいつもこいつもゾンビみたいな動きしやがって。どうすんだよ黒子」

「私に聞かないでくださいませ。相手は操られているだけの一般学生で」

刹那。

左端の女学生の黒髪が靡いた。

戦慄する。身構えた圭介の目の前で轟音が響いた。間近で打ち上げ花火を見た時のような音波の圧力が圭介を襲う。

来るッ！

直感が一層強くサイレンを鳴らした。拳を握り直し、足元と両目に意識を配る。

集中する視界の中、女学生の傍らの商品棚が分厚い空気の壁に打ち出され、砲弾となって滑空する。

“流体操作能力”だ。

無論圭介はその名前も原理も知らない。だが、この上なく直感は精錬で、体は呆れるほどに正直だ。

避けられない。後ろの黒子が危険になる。

小刻みに体を揺らしつつ、圭介はすばやく右足を引いた。

高速で襲いかかる自分以上の質量の塊。正面からぶつかれば呆気なく圭介は吹き飛ばされ、背後のガラスを破り外に投げ出されてしまふ。

残り5メートル。

振り子のようにして体に溜め込んだ小刻みな振動の勢いを、一気に踏み込みへと還元する。

踏み出した右足の一步。靴底が艶やかな床を掴み取り、離すまい

と足の親指に力を込める。

振動と踏み込みのスピードは死んでいない。腰を回し、膂力の全てを左足に注ぎ込み。

自分よりも遙かに大きな商品棚の底を、左足のつま先が捉えて。「でいいいいいいいやあああつ！」 砲弾の軌道を、蹴って逸らした。

商品棚が天井をこすり、蛍光灯を割り、階層を壊し、壁をぶち抜き、建物の外に躍り出た。

コンクリートの粉が舞い、昼間に関わらず視界が鼠色に塗りつぶされた。

圭介は後ろを振り向いた。なぜだかニルフおとなしく圭介から一歩下がっている。もちろん表情からは何も読み取れない。

とりあえず圭介は右の親指を突き立てた。

「 ってなに自慢げなんですのツ!？」

拳大のコンクリ片が顔面に飛んだ。反射的にそれを右手でつかみ取る。

粉煙の向こうに黒子がわなわなと肩を震わせている。圭介はそれを笑い飛ばし、すぐに身を翻した。

「そうは言ってもね 来るんだよ、これがなァ！」

粉塵を引き裂き、奇跡の光が圭介の網膜を焼き付けた。

次の日・夕 「16:30」 「……知識意欲です」

視界が朱に焼き付いた。反射的に上体を後ろに傾ける。鼻先を火炎が走り抜け、割れ残った窓ガラスに取り付いた。

焦げたにおいを押しのけて、間髪入れずに異質な気配が伝わった。反らした上体を戻し、床を蹴って商品棚に飛び移る。

先ほどまで圭介の立っていた場所に冷気の帯が走り抜けた。空气中の水分が凍りつき、艶やかな床をアイスバーンに飾り付ける。

「まったく物騒だなオイ！」

棚の向かいに飛び降り様に虚ろな目をした男子学生を容赦なく踏み潰す。意識を奪うほどに強く、しかし死なない程度を心がける。

二、三度ひくひくと手足を震わせて男子学生は沈黙した。しかし圭介は一瞥もくれない。その暇がないのだ。すぐに次が来る。

また火の玉だ。野球ボール大のそれは、弾丸のような速度で圭介に迫る。

野球ボール大。

相対した火の玉の大きさに、ふと圭介の脳裏に閃きが走る “打ち返せないか、これ” と。

「でいいいいいいいりゃっ！」

気合一閃。

中段の蹴りが風を切り、つま先が寸分狂わず火の玉を捉えた。

足に炎の熱が伝わる。圭介は顔を僅かに歪め しかしためらうことなく振り抜いた。

“ぼっ”。

軽い音とつま先の小さな煙を残し、空気を焼いて疾走していた火の玉は、呆気なく消し飛んだ。

「おおっ……」

自分でやっておきながら目を丸くして、間髪いれずに襲いかかってきた紫電をサイドステップで回避する。勢いあまって突っ込んだ

洋服棚の商品を適当にひつつかみ、手当たり次第に投げ出した。

衣服のカーテンに一瞬だけ身を隠し、狙いを手近の女子学生に定めた。機敏な足運びで床に散らばる服を巧みに避けて、近づいたところへ水面蹴りを叩き込む。

女子学生の足は床を滑り、肢体は低く宙を舞った。女子学生が着地するより早く、駄目押しとばかりに圭介の左拳はそれをすくい上げた。しゃがんだような低い体勢から、立ち上がりに乗じて振るった豪快なアッパー。女子学生の体を遠慮なく宙空に打ち上げた。

顛末を見送らず、圭介は身を翻した。

「あ、なっ、たつてえ！ 人はあつ！」

すぐ傍らで黒子が声を張り上げた。内心で圭介は首を傾げる。

今まで黒子はこんな場所にいただろうか？

黒子に気を取られている間に標的はすぐに圭介の間合いから逃げ去った。

どうやら圭介より黒売僧の黒子を警戒しているようだ。怒涛のい能力ラッシュは鳴りを潜め、じりじりと遠巻きにこちらを見据えて身構えている。

「なに平然とぶちのめしてますの！ 関係のない一般学生を！ あまつさえ能力者まで相手取って！」

「いや、しゃーねーだろこの場合。それともなにか？ 黙ってやられろって？」

軽口もそこそこに、圭介は注意を広げて索敵した。最も近い敵意の位置は すぐ脇。

鬼の形相の黒子である。

「確かに如何ともしがたい状況ではありますが、あなたの言う通り向かいに大元がいるのでしたら、こうしている間に逃げられてしまいますわ！」

「……………なん……………だ……………？」

「なんで今はじめて気がついたようなりアクションをしますのっ！」
もう嫌だと言わんばかりに黒子が悲鳴を上げた。

半分ほどそれを無視し、圭介は呼吸を整える。目と鼻と耳の感覚を総動員し、にじり寄る敵の数をカウントする。

物陰に3人。

堂々と仁王立ちが2人。

瞬く間に圭介が味方を無力化してみせたせいか腰が引けているのが3人。

計 8人。

「じゃあどうすんだ。こいつら振り切るのも面倒だし、倒すのもやっぱり時間がかかる」

「……私がテレポーターであることをお忘れですか？」

「えっ」

「そろそろツッコみませんわよ」

吐き捨て、黒子は無造作に膝上にあるスカートの裾をめくりあげる。露わになった腿の肌は白く、華奢で柔らかな質感を無駄なく魅せつけた。

ただし 無粋な金属矢を幾つも差したホルダーが巻き付けられてさえいなければ、だが。

「テレポートで向こうに移動します。このように」

一点 仁王立ちした学生のひとりを注視して、腿の矢を2、3、細い指でなぞった。

シユン、と矢が腿から消える。同時に学生の服の裾を針が貫いた。壁に張り付けられた学生はもぞもぞと何度も何度も動いてみせる。壁から体が離れないようだ。

「グレート……」

ジャケットからグローブを取り出し、圭介は軽く口笛を吹いて感嘆を示した。

右手にひとつ。左手にひとつ。グローブを嵌めて指を動かし、感触を確認する。

「ふたりくらい本調子なら楽勝ですが、今の私では私を含めてあとひとりを運ぶのがせいぜいですわ」

よくわからないものの適当に相槌を打って、圭介は両の拳を握りしめた。腕を上げ、息を細く吐き出した。集中力をまた一段と鋭利に研ぎ澄ます。

「そして、こうして能力を使って戦い続けていても、疲労が溜まってやはりレポートは使えません」

「ジリ貧ってことかい。根性足りんぜ」

黒子の能力を見せ付けられてか、一段と周囲の学生は腰が引けていく。

そんな状態。こんな状況。数と火力で圧倒しているものの決め手を欠いている彼らの次の手は。

学生と圭介は同時に動いた。

一気に床を蹴り飛ばし、圭介は高く跳躍した。

男子学生の右手が赤く燃える。目は圭介を見ていない。

正気を失っている。勿論そうだ。まともな頭で圭介のような不良然とした人間に歯向かう学生はそういない。

“そういう意味だけでなく”。

“視線が” 圭介に向いていない。

その先にいるのは ニルフだ。この乱闘の中、今までおとなしく“おにいたんだいすき妹キャラ”を演じ続けて商品棚の隅に隠れていたのだろう。無論、昨日のようにガトリングを四方八方を鉢の巢に帰るよりはよほどいいが。

ニルフは別の男子学生に片手の手首を取られ 今、商品棚の陰から引きずり出された。

男は右手を炎ごと握りしめ、スタンスを取る。ニルフまでの距離は遠い。直接殴るのではない。もっと別の方法で。

いや。

どうだつていい。そんなことは。

「でいいいいいいいいいいいいいいりゃッ！」

火拳の男の顔面に容赦なく右膝を打ち込んだ。そのまま洋服棚に押し込んで、ノビた学生の第2ボタンを引きちぎった。

鋭く息を吸い込み、呼吸とタイミングを合わせ　　オーバー스로
ーから投擲。

右手の人差し指と中指をひっかけて、スピンをかけた第2ボタン
が空気を裂いた。ボタンは綺麗にニルフを拘束した男の額を捉え
刹那。

小さなうめき声をあげ、男は仰向けに倒れた。力の抜けた指から
ニルフの手首はするりと抜ける。「テメーらあああああッ！
俺の女に手エ出してみろ！　テメーらの×××に俺の右腕を突っ込
んで内側から×××を×××して×××るぞ、ゴルフあああああ
あああッ！！」

「……は？」

圭介がいきなりアメリカ海軍式にかなりたてたせい、黒子は目
を点にしてドン引きした。それを横目に、圭介は無造作に片手を振
った。

「黒子。行きてーならひとりで行け。俺にや、ここでやることでき
たからよ」

「あなたって人は……本当に……」

うなだれた黒子をよそに、圭介の五感が7時の方向　　死角から
の接近を警告する。身を屈め、素早く翻った。

学生が猛然と突っ込んで来る。操られている人間にしては鋭いタ
ツクルだ。

圭介はトン、と軽く床を蹴り上げた。学生のタツクルは圭介の脇
を抜けていく。すれ違いざまに足払いを食らわせて、雑なケンカキ
ツクでたたみかけた。

「すぐに終わらせて合流してやる。後たったの6に　　」
言いかけて、圭介は目を疑った。

増えている。場に寝ている人間の倍近い量の学生が圭介を見据え、
身構えているのだ。

「……あ、新手ってことはまだ近くで新しい人間見繕って操って
ることだろ？　捕まえるチャンスじゃないか」

やや情けない裏声で激励の言葉を送り、圭介は視界の端に人影を捉えた。

影の手元が光っている。紫電。また電撃だろう。靴底の固い感触を踏みしめ圭介は跳躍する。奇跡的に残っていた蛍光灯を器用に掴み、手首を回した。

カン、と小気味よい音が響き、圭介は蛍光灯を片手に着地する。すぐ脇で雷光が輝く。全身の神経が警告を発し、圭介は蛍光灯の先端を稲光に向けた。

一瞬、蛍光灯が圭介の手元で強く発光し。
。「うわっちい!？」

次の瞬間に弾け飛んだ。目の前で起きた強い輝きに圭介は目を眩ませた。

視界が黒く塗り潰され、否応なく怯んでしまう。倒れないよう懸命に気を保ち、拳を強く握りしめた。残りの感覚がその穴を埋めるべく一気に研ぎ澄まされる。

様々な情報が脳裏にせめぎ合い、脊髄反射的に体を動かした。本能の命じるまま、正拳を前方に向けて突き刺す。

じんわりと拳に痛みが走った。
何千回、何万回と伝わってきた鈍痛だ。

柔らかい肉と硬い骨を捉えた感触。人体を直に壊す感覚。圭介の好きな喧嘩につきものの感触だが、これ自体が好きというわけではない。

かと言って血反吐が好きなのでも、他人を痛めつけることそのものが好きなわけでもない。

そう。

暗闇の視界で拳を握り、圭介は独白する。
互いに誇りを賭けて必死で無様にあがく喧嘩が、こんな一方的なはずがない。

一方的に仕掛けられ、一方的に誇りを賭け、一方的に戦力を供給し、一方的に殴り倒す。これのどこが喧嘩なものか。

ただひたすらに泥臭く汚らしいだけの 暴力だ。

断じて。圭介が今までに培い、鍛え、争い、貫いてきたものは、こんな無秩序な暴力では、断じてない。

「行つて来い……風紀委員。この茶番をとつと終わらせる」

吐き捨てた再びの激励に、暗闇の先から黒子の無言のうなずきが返ってきた ような気がした。

「不満なのですか？」

足音がひとつ、背後で鳴った。圭介の感覚をかいくぐつたのだ。指先がびくりと痙攣する。

だが同時に理解する ニルフだ。

「んだよ、心臓にわりーぞ」

「解答を求めます。不満なのでしょうか？」

「気分は最悪だ」

「なぜ？」

「歯応えがねー。壁殴つてる気分だ」

「あなたが痛めつけ、傷つけているのは間違いなく人間です」

「知ってんよ、んなこと。……知ってんだよ」

口を動かしながら、しかし意識は油断なく周囲に向ける。

それでもなお、語尾には力がこもっていた。

胸の奥底に内在していたものが、圭介の意識の隙を突いてじわじわと染み出ていく。

「弱い癖に意地の張り方も知らねえ。ぶつかり方がなってねー。物騒なだけのつまんねー相手だ。端から見てもムカムカするけどよ。ま。黙つて見てるより体動かした方がマシだからな」

「……やはりあなたの思考は理解できません」

かちやり。背後で金属の擦れる音が耳を搔く。

まさか昨晚のようにガトリング掃射なんていう真似をしないよな

圭介は生唾を飲み込んだ。あんなのを撃ち込まれたら、並の人間ならまず血煙確定である。

視界が塞がれているのは幸い いやいやそうではなく。

圭介は頭を左右に幾度か振った。そういう問題じゃなーからこれ。「今日、未明より私はあなたを観察していました」

「まじかよ。ツケられてる気はしてたけどよ……ん？ でも気配？ あれ？」

「あなたは意味が分かりません。行動。目的。手段。無駄が多く不明瞭です。」

だから接触を試みもしました。会話を傍聴し行動・目的・手段をこうして共有してもなお理解ができません。例えば「

かちやかちや、と金属音が連続する。まるでなにかが變形しているような音だ。

殺気をまるで感じさせない。さすがロボットである。おかげで本当に“本当”なのかがまるで見当がつけられない。

「今です。あなたの目的は“犯人への制裁”であつたはず。しかし今、その接触の機会を棄ててまでこの場で危険を犯し異能者を幾重も相手に立ち回っています。不満を露わにしなから」

「……知りたいか？」

芝居かかった大きな動作で両手を広げ、圭介は一步、前へと踏み出した。

じんわりと視界が回復の兆しを見せる。普段人並み外れた眼力を誇るためか、戻りが少し悪いようだ。

「なら見とけ。真の漢とは、背中で語るものなのだぜ」

「人体の背に発声機能はありません。筋肉の伸縮から意図を汲み取れ、ということでしょうか」

「……シマンねーなー、くそ」

がっくりと肩を落とした後ろ姿をニルフに贈り、圭介は異能者に向けて飛び出した。

何人目かの異能者を床にキスさせて、圭介はふと窓の外に視線を向けた。ようやく目が本調子を取り戻す。

バリケードが構築さるつつある。警察　しかも機動隊クラスだ。鉄かもわからない金属色の盾が隙間なく建物入り口を取り囲んでいる。とてもじゃないが真正面からの脱出は不可能だ。

いや。事態はもっと切迫している。

このままでは突入も時間の問題だ。明日までの滞在で依頼達成という制約がある手前、悠長に捕まってやる訳にはいかない。

いい加減、うかうかしてはられないのだ。

逃げなくては。

そのためには、ニルフと圭介を窓際に追いやったこの無限増殖異能者軍団を振り切らなければならない。

「さすがに全員ボコるより機動隊突入が早いだろうな。やれやれだぜ……マジで壁蹴ったら建物倒れて逃げらんねーかな」

「注意。外に展開している部隊は“警備員”という公的な武装組織です。構成員には学園都市内で教職、研究職に就いている者も含まれており、規模は――」

「あーあーわかったわかったうつせーなーちくしょう」

投げやりに答えた圭介の眼前で、数人の学生が固まっていく。

瞬間、冷気の爪が圭介の肌を引っ掻いた。周囲の温度ががっくりと落ち込こんでいるのだ。

冷気の収束。

圭介の直感が告げる。

学生が固まっているその中心で、大気に溶け込むありとあらゆる微粒子が寄り集まって凝固する。

「警告。逃げなさい」

できたのは、一塊の冰山だった。

否。山という表現は厳密ではない。

地に着かず、宙空に浮かぶその様は、一片の水晶やダイヤモンドを思わせる形状だ。

およそ山とはかけ離れながら、それでもなお“冰山”と揶揄されるのは単にその巨大さ故である。

身じろぎひとつで床や天井に溝を穿ち　人すらも凍り付かせ、身の中に取り込んでいる。内包した異能者の力を汲み上げて、冰山は一瞬毎にその身を広く、厚く変貌させていく。
「こっ……の……ッ！」

背中に走る悪寒を吹き飛ばす熱が体の奥からこみ上げてきた。圭介は拳を握り直し、奥歯を噛み締める。

「危険です」

冰山に一步踏み出した。途端にニルフが手首を引いてそれを制す。
「……なんだ、あれ」

「能力の励起現象でしょう。同種能力を高いレベルで別個体が発してAIM拡散力場に干渉することで同調し共振させ、干渉強度を高めることにより、単独による発動以上の能力効果を生じさせていると考えられます」

「わけわからん」

吐き捨てて圭介は意を決した。

ニルフを振り払い、右手を軽く握り直す。細く息を吐いて　ス
イツチを押し込む。

床を無造作に蹴り飛ばした。体は瞬く間にトップスピードに到達する。

速度を一切緩めず洋服棚を機敏に避け、反応できず棒立ちの異能者を置き去り　氷粒を巻き上げ、アイスバーンを踏み切った。

「でいいいいいりやあああつ！」

右の拳が冷気を切り裂き冰山を捉えた。鈍い重低音が場を満たし、表面には蜘蛛の巣状の亀裂が幾つもあり　ながらも、決して砕けない。

「……おっ？」

握りしめた拳をよそに、閃光が冰山を突き抜けた。

遅れて轟音が響き渡り、氷の割れゆく悲鳴はかき消えた。

氷の塊は弾け飛ぶ。

捕らわれていた学生は宙に投げ出され 圭介やニルフともども、

大通りへと落ちていく。

「なんじゃこりゃあああああああああ！！！」

合掌。

* * *

奇跡だ。奇跡に違いない。

などと、昨晚と何らひねりのない感嘆を漏らしつつ、圭介は

ゴミゴミとした陰気な裏路地を駆けていく。

両手にニルフを抱きかかえ、奥歯を噛み締め呼吸を制す。

宙空に投げ出されたものの、ニルフを担いで残った氷塊を蹴

り、上手いこと向かいの建物の屋上に跳び移れたのは幸이었다。

黒子が向かったはずの建物はふたつ隣であることを除けば、だが。

直接行くこともできず、依然として左腕に取り付きたがるニルフ

を仕方なく抱きかかえ、ビルを駆け降り目的の建物を目指して裏路

地に入り 現在。

もちろん警備員もすぐ近くだ。捕まれば面倒必至である。

可能な限り気配を消し、細心の注意を周囲に払う。

「能力に巻き込まれた学生は昏睡」 「熱吸収能力ばかりじゃん」

「男性ひとりと中で争っていた」 警備員らしい喧騒が耳に

入る。いずれも大通りからだ。

あれだけ派手な（結果オーライの）脱出劇だったのだ。

現象自体の衝撃と落ちてきた氷漬けの学生のダブルパンチがいい具合に圭介達から注意を逸らしてくれたようだ。まったく奇跡である。

目的の建物は目と鼻の先だ。裏路地からでも直にたどり着ける位置である。

実際、建物の裏手まではものの数秒で到着したが　裏口が開かない。

触ったところ、かなり頑丈な扉のようだ。数ミリ鉄板程度は蹴り切れると自負している圭介にも蹴破るのは難しい。

すると　圭介は目を移す　あの非常階段を登って、適当な窓ガラスでも破って乗り込む他なさそうだ。そこそこの骨の折れる仕事である。

言うまでもなく肉体派の圭介は体力に自信がある。しかしそれでも無限増殖異能者軍団を相手取った直後にこれは、なかなか堪えるものだ。

ため息のひとつもつきたい気分だが、うかうかしてもいられない。「呼吸の乱れを検出。……あなたでもそうなるのですね」

「これでも人間なんでね。人は俺を鋼鉄の男と呼んじやいるが、本物には程遠いみたいだな」

珍しく頭が回った冗談を叩いて、圭介は鉄骨組みの非常階段を昇っていく。駆け上りたいのは山々だが、少しは体力も温存しなければならぬ。

「消耗しているのなら、休息を推奨します」

「休んでるヒマがねーの。黒子に追いつかねーと」

「先の風紀委員の女学生ならば、心配に及びません」

「はあ……っ？」

怪訝に顔を歪める圭介に、ニルフは無表情で、極めて無感情に告げた。

「既に敗北しています。増援は無意味でしょう」

絶句した。

意図せず両腕に力が籠もった。腹の奥から激情が吹き上がり、野性の手綱を掠め取る。鞭を打たれて暴れまわる野性を、残った一角の理性がどうにか律した。「主だった推察要因は3つほどあります」激情に振り回される圭介の際どい状態を知ってか知らずか、ニルフは抑揚のない可憐な声で答えを述べた。

解答を暗記しているかのようになり、淀みなく。

「ひとつ。件の犯人は極めて高強度の精神感應性能力者です。対して、かの女学生の能力は空間跳躍。すなわち射程内に入れば精神感應を防ぐ術はありません。」

ふたつ。能力強度についてです。概算ですが、外から店内の複数名を造作もなく操作した犯人の精神拘束力・射程圏はともに十分量です。接近した女学生ひとりを新たに押さえることは難しくないとはいえず、容易に推量できます。

みつつ。なによりですが、私達は精神拘束された学生とつい先ほどまで戦闘を展開したという事実です。精神能力から身を守る術もなく、無効化にも失敗したとなれば当然でしょう」

「そうかよ……っ！」

吐き捨てて、圭介は階段を登る足を止めた。

なんだか、もう。

両手で抱きかかえていたニルフを無造作に投げ捨てた。特に動じた様子もなく、ニルフは安い金属の階段へ軽やかに着地する。

「怒っていますね。なぜです」

「おこつて……？ ……ああ、そうなのか。悪い」

野暮ったく頭を掻いて圭介は重苦しくため息をついた。ニルフはさして動じた様子も感情らしいものも表に出さず、圭介の顔をじつと見据えていた。

「あなた自身、感情を理解していなかったのですか……？」

「へその下あたりからこう、ぐわーって来てたのはわかってるんだけどな。いつもの怒るとはなんか違うっつーか、よくわからん……」

「つてことはわかんねーのか」

圭介は顎に指を添え、頭を捻った。そこそこ考える努力をしてみるも、ギアもチェーンも錆び付いている圭介の頭がろくに回ってくれないはずもない。

オーバーヒートしかけた頭を左右に振って、圭介は肩をすくめてみせた。

「まあ、俺がバカなせいかもしれんが。こう……“自分はこうだ”ってわかってるヤツ。あんまいないと思うぞ」

「人は、自身のプロファイリングすらできないと？」

「俺は無理だな。頭いてえ」

「では、あなたは自分の可能と不可能を弁えていないのですか？」

そんな状態で自律行動など……危険極まりない」

「うっせー。だからバカだっつってんだろ……てか、なんだ急に。」

よくしゃべんな」

怪訝に眉をひそめた圭介の言葉に、ニルフの唇がぴたりと止まった。半開きのまま、数秒。

「……知識意欲です」

フリーズののち、視線をそらしたニルフは短く返答した。

なにか釈然としないものを抱えつつ、圭介は視線を先ほどまで疾走していた路地に落とした。

見覚えのある太陽頭と茶髪である。身を乗り出して声を張り上げた。た。

「おい！ 当麻とビリビ……おい待てあの“化け狐”どこいった」

「呼んだかの？」

ひよい、と“化け狐”が顔を覗かせた。

あろうことか、圭介の背後から、である。

「うおおおおおおおおあああつ?!」

驚いて飛び跳ね階段から路地まで身投げしかけた圭介を“化け狐”が抱き寄せた。一層騒ぎ立てて暴れまわる圭介をよそに「よしよし。元気でかわいいのう」などと頭を撫で回す“化け狐”を、端か

らニルフは無感情に、無言で観察する。

「……」

ただその様は、質問の言葉すら練れずにただただ絶句していたようにも見て取れた。

* * *

「ごめんなさい」

人込みをはさんで、“セブンスミスト”からはやや離れた、しかし変わらず汚い路地裏で。

両手をついて、圭介は誇りもへつたくれもなく深々と頭を下げた。紫電を巻き上げ、学園都市随一の電撃使いこと御坂美琴、通称ビリビりはふんと鼻を鳴らし、耳元のイヤホンマイクに手を当てた。

「ああ……それなら大丈夫。今私が髪の毛チリチリにやってたところ。写メ？ うん。わかった」

焦げ臭い毛先を気にしつつも、さしたる抵抗も見せず土下座の姿勢を崩さない。一応、圭介なりの誠意の顕れである。

ぱしやり。頭上から無遠慮なシャッター音が鳴った。

現役時代 圭介がチーム雷衝の頭を張っていた時代 の後輩達が見れば間違いなく「ナメられた」と口を揃えてお礼参りの戦争を仕掛ける暴徒となるであろう危険な写真を手元に残し、ビリビりは半眼で圭介を見据えた。

「まったく、馬鹿な無能力者はなに考えてるのかちつとも理解できないわ」

短く吐き捨て、身を翻した。肩口にまた、電光が閃く。

そろそろいいだろうか 圭介はのろのろと頭を上げる。

今度は当麻と目が合った。

すぐ手前でしゃがみ込んでいた彼は、気怠そうに頭を掻いた。

「あんたさ。どうしてこんなことしちゃったんだ？」

「なんでってそりゃ」

記憶をさかのぼる。

あろうことが昨晚ガトリングをぶっ放して完全にハートと書いて心臓を撃ち抜き肉塊に変えようとしていた女型ロボットを指して「俺の女」と叫ぶ圭介。

そのくせ殴るだけ殴って「気分が悪い」とぐちぐちこぼす圭介。

当初の目的と違うと諭されながらも無限増殖異能者軍団に単騎特攻する圭介。

結局外に吹っ飛ばされ、謎の閃光（超電磁砲）で宙空に投げ出されてその場から逃げだす圭介。

（なんだそりゃ）

改めて思い返すと 当事者ながら、意味がわからなかった。

ビリビリは「なにを考えているのかちつとも理解できないわ」などとこぼしていたが、圭介本人ですら理解できていないのだから仕方ない。

それでも頑張って、これを言語化するとすれば。

「……その場のノリで、つい」

最悪である。

当麻は呆れたように深く深く深くため息をついて「あんた本当に社会人？」と見下げ果てた視線が注がれた。

年下の学生にこうまで言われる始末である。情けないことこの上ない。

「セブンスミスト」での乱闘が治まったらしいからな。相手方も移動するはずだ。操ってるはずの白井を使っただけな。

今、初春に白井の携帯のGPSや耳に付けてた無線機なんかから逆探知をかけてもらってる。……あんたはどうするんだ？」

「……はあ？」

当麻の物言いを受け、圭介は反射的に睨み返した。

まるで “これ以上邪魔するなら帰ってくれ” と言わんばかりの言い方だ。

「てめえ。今のセリフ、誰に向かって言ったんだ」

ゆったりと立ち上がり、圭介はしゃがんだままの当麻を憮然とした態度で睨みつけた。緩んでいた拳を握り直し、牙を光らせ、野性的に笑ってみせる。訝しげに見返す当麻の横っ面をを全力で殴りつける勢いで、圭介は拳を天に突き上げた。

「奇跡はないっ！ 故に我々は突き進むっ！ 阻む者は踏みつける！ 奪う者には奪い返せ！ ただただただ走り抜け、魂が誇りをその身に刻み、己が力の徴を立てろ！」

張り上げた言葉に続き、圭介は右の拳を自身の胸に叩きつける。

心臓の高鳴りを肌で感じ、その熱さが一層骨身に染み込んでいく。目が覚めるような感覚だ。

「……ってことだ。かかってくるならなんであれ、俺は戦う。奪われたなら奪い返す。やるに決まってるだろ黒子奪還戦」

依然として面食らったままの当麻に不適な微笑を送り、圭介は必殺技を決めたヒーローよろしく見栄を切った。

瞬間、後頭部を衝撃が襲う。

「ひでぶっ!？」

「うっさいのよ！ まだ近くで警備員が捜査してんのよ、あんた探してー!」

圭介に強烈な打撃をお見舞いした右手を軽くはたく。小さなため息を漏らしながら、ビリビりは仕切り直して自分の付けるイヤホンマイクを指差した。

「それと やっぱり。黒子の携帯と無線の信号が同じ場所から着てるわ。少し遠い場所ね…… “学舎の園”」

「なるほど。で、どこ」

曖昧な圭介の言葉を正しく汲み取り、後ろに2歩分程度離れていたニルフが口を開いた。

「にいに。だいたいここから東に10キロもないかな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596z/>

魔不良冒険奇行 ~怪傑! 超電磁砲編~

2012年1月6日04時45分発行